



天津師範大学の卒業式

天津
便り

News from TNU

去る 6 月 30 日午前九時半より、天津師範大学国際教育交流学院と三重大学との協同教育による日語コース学生 20 名の卒業式が、八里台校区金橋賓館の一階会議室において挙行された。

式典は、徐瑛国際交流処副処長の開会宣言に始まり、趙浩童・鍾潔瑩両学生代表の四年間の活動報告、馬静教員の担任としての指導に関する報告、楊薇国際交流処副処長の、パワーポイントによる DD 協同教育プログラム協定の成立過程や四年間の諸行事に関する映像資料を含めた紹介があった。

ついで、鍾英華学院長(国際交流処長を兼任)は、協同教育の実施に協力を惜しまなかった関係者への謝意を述べ(天津師範大学の王廷文副学長・梁福成教務処長・李若冰財務部長・張家珩学生処長・王臨恵副学院長の各位も列席)、最後に卒業生に対して、日本人のすぐれた「匠人精神」(「タクミの心」と訳すべきか)をしっかりと身につけ、どのような進路や職場においても、自分自身の考えをもって行動し、日中の架け橋となしてほしいとの訓辞を述べた。つづいて、我が上垣渉教育学部長の挨拶があり、日本式の巻紙に記した式辞を読み上げ、中国人列席者の注目を集めた。上垣学部長は、その中で、自立的な精神に裏打ちされた「協調性」を涵養するとともに、基礎的能力の上に「応用力」を積み重ねること、この二つを今後の学習や生活の中で課題とし、日中友好交流のために活躍してほしいと締めくくった。

式辞がおわり、卒業証書と学位記の授与に先立ち、学業・操行・クラス活動全般にわたり優れた優秀学生 6 名の表彰が行われた。ついで、一人一人、王副学長・梁教務処長と握手しながら、それぞれから学院の卒業証書と「学位証(文学士)」を受け取り(中国では卒業証書を与えられても学位を取得できない場合がある)、ツーショットの写真を撮る。それが終わると次に、上垣学部長から、「日本語教育標準科目修了証」が手渡され、全員による記念撮影で、式典は終了した。なお、式典には、三重大側から、上垣学部長・秋元ひろと国際交流委員長・伊藤彰男名誉教授と私が参加した。また、来年 4 月に三重大に留学する二期生も、日本語能力 1 級試験を一週間後に控えながら、担任の林樹馨さんに引率されて式典に参列した。「君たちも二年後にはあそこに座るんだね」と声をかけると、「ハイ、頑張ります」と弾んだ声が返ってきた。

式典終了後、12 時より賓館一階レストランで、卒業生主催の謝恩

三重大学国際交流センター客員教授 東 晋次



巻紙に記した式辞を読まれる上垣学部長

会が開催された。両学部長はじめ関係教員と卒業生とが乾杯しながら、「おめでとう」「よく頑張ったね」と「ありがとうございました」「お世話になりました」の交歓で、教員、学生ともども、困難な過程に一区切りをつけたよこびが満ち溢れていた。周悦怡さんが導いてくれた方々への敬意を表すべく、中国の民族歌「长大后我就成了你(海寄朔厘祥攪阻低)」(大きくなったら貴方のようになる)を高らかに唱った。感極まったか、上垣学部長がやおら立ち、カラオケで何度か練習したという「琵琶湖就航歌」を歌って、卒業生の前途を祝した。卒業生もそれに応えて、「世界に一つだけの花」を日中両語で斉唱し、座はいよいよ盛り上がった。天津師範大の、楊薇・田園・姜征・馬静・馬曉菲の教員スタッフも、乾杯しながら卒業生を祝福している。

第一期生を一年次に指導した中田常男名誉教授はこの場におられなかったが、2 年次から天津在住主管として種々の困難を克服しながら師範大の卒業まで親身に世話をしてきた伊藤先生も感慨入の面持ちであった。中田先生と共に一年次から一期生を指導し、三重大留学時の細々とした事柄にも心を砕いた秋元先生も同様であったろう。

この実験的プロジェクトの進展に向けて陰に陽に助力を惜しまれなかった三重大関係者の皆様に、この場の雰囲気や少しでも伝えることができ、喜びを分かち合っていたいただけたらと念じて一文を草した次第である。合作并学事業として中国教育部の正式認可が下りた現在、プロジェクトの展開とともに、両大学の協同教育の成果がさらにあがり、日中双方の若者の相互理解と自己認識がますます深まることを願うばかりである。



8月20日（金）から24日（火）の日程で、天津市実験中学の一行8名（教員5名・生徒3名）が附属中学校との交流のため来日しました。ご存知のように、本交流は三重大学教育学部と天津師範大学との関係がきっかけとなり、両大学の附属学校にあたる三重大学教育学部附属中学校と天津市実験中学の間で交わされた覚書によって毎年実施されています。そして、附属中学校の行事の中でも重要な位置づけにあり、今回も天津市実験中学の来日に先駆けての中国語講座や中国の様子を知る事前学習を行い、単なる親善ではなく、多感な年代である生徒たちに真の国際理解としてつながることを目標に実施しています。

8月21日（土）京都視察と22日（日）の三重県内視察の後、23日（月）に附属中学校で交流事業および三重大学教育学部への表敬訪問を行いました。この日は夏休み期間中でしたが、生徒全員の登校日とし、盛大に交流事業を行いました。主な交流内容は以下のとおりです。

- ・ 生徒全員による校歌披露と音楽部の合唱
- ・ 生徒会・美術部共催の風鈴贈呈
- ・ 天津市実験中学の生徒による「中国の伝統舞踏、横笛、中国琴」の演奏
- ・ 天津実験中学の教員および生徒による「中国文化について」の授業
- ・ 生徒会主催による「盆踊り体験」

ご存知のように8月23日はあいにく大学院入試、すべてを見学することはできませんでしたが、何とか、民族衣装を纏った天津市実験中学の生徒による舞踏と楽器演奏を鑑賞することができました。中国では教育課程の中で伝統文化を重要視しているということは以前から聞いていましたが、そのパフォーマンスのレベルの高さに圧倒されました。一方、天津市実験中学一行の劉瑞芬（リウ・ルイファン）団長は、附属中学校の校歌と音楽部の合唱を聴かれ、その歌唱力の高さに感銘され、更に、附属中学校の生徒たちの礼儀正しさと行動力に高い評価をされました。

三重大学教育学部への表敬訪問では上垣学部長と八木副学部長が対応され、これからのより一層の交流事業充実の期待を込めて来年度の交流実施の確認をしていただきました。

夕方からはパセオで送別会を開催しました。三重大学側から



京都視察（清水寺にて）

は後藤理事、江原学長補佐、上垣学部長、八木副学部長、山根前附属中学校長、東前理事がご出席され、総勢47名という盛大なものでした。この送別会のなかで特に印象に残っているのは、ホームステイをした天津の生徒が附属中学校側のホストファミリーとの別れを惜んでいる光景でした。中には目を真っ赤にして別れを惜んでいる姿もあり、私もジーンとききました。たった1日のホームステイでしたが、これだけの友情が芽生える子どもたちの心の純粋さを改めて実感するとともに、今後の本交流の位置づけをより一層強固なものにするべきであると確信しました。最後に、天津市実験中学側より附属中学校の国際部担当の先生方に、「来日期間中のきめ細やかな対応に深く感謝します」というお言葉を残され、送別会場を後にされました。

このような交流の結果を「目に見えるもの」にするには時間が必要です。しかし、今は「目に見えない結果」でも、心には何かが残り、子どもたちの成長過程の中でいつしか開花する時がくると思います。本交流に関わった子どもたち、この貴重な体験の将来への大きな財産として心に留めお置いて欲しいと願っています。



天津市実験中学の生徒による中国琴の演奏と中国舞踏の披露



盆踊り体験に笑顔で応える両校の生徒たち



浴衣を着て踊る天津市実験中学校の教員と生徒たち

My New Life in Japan

平成 22 年度 教育学部特任講師 張 建梓 (Zhang Jianzi)



研究室でくつろぐ張先生



三重大学サマーコンサート 2010

On May 13, 2010, I finally reached the land of Japan and came to Mie University where I would live and work for almost one year. I would like to know Japan's education and culture deeply. Efficiency is the first key word when I think of Japan. My entry-procedure as a foreign teacher had numerous steps, but it was completed just within one week. Every step was clear and concrete. Thanks to all the teachers and people involved in the process, I was able to integrate myself into Japan promptly.

The students in my class are careful and diligent. They show a strong desire to know about Chinese culture and places to visit. To satisfy their wishes, I specially show several videos in my lecture, and students enjoy watching them very much. The academic efforts in Mie University are impressive in that teachers and students are greatly involved in teaching improvement (授業改善). The university can know what students think about the classes through the class evaluation and their ideas are highly valued. During this process, a teacher is not only a knowledge-spreader but also a friend in life and a guide in study. This class evaluation helps the university find if there are problems and how to solve them.

People are harmonious and active in Mie University; there are so many clubs available, and students can easily find a suitable one to enrich their university lives. I find the clubs are formal and serious; students are enjoying clubs and are very active in them. The Summer-Concert 2010 of the Mie University Orchestra was impressive. The students' excellent performance won so much applause and many flowers.

As a teacher, I treasure this chance to learn a Japanese university's teaching methods and ideas. My experience in Japan will better my teaching skills and deepen my insight into education.

国際インターンシップ

My Internship in Japan

Nasak Chancharoen



Shitomo Area Hazard Map

I am a third-year student of Kasetsart University, Thailand. I came to Japan in order to take part in the International Cooperative Education and Career Development (ICECD) at Mie University. My major is computer engineering. So, I had an internship at Geo Work near Tsu Station. Prof. Haruhiko Okumura of the Faculty of Education was my advisor throughout the internship.

Using technology and the Geographic Information System (GIS), the company creates hazard maps that are useful for disaster prevention and city planning. In the internship I learned the process of making hazard maps.

Prof. Kaoru Fukuyama (the GIS laboratory of the Faculty of Bioresources) kindly sent two of his students-- Keigo Kitada and Yue Yang--to study with me at the company. Not only did they translate the Japanese language to the English language, they helped me learn how to use the GIS.



Nasak Chancharoen

President Hiroshi Ito and Ms. Miho Kimura taught us how to make hazard maps. Finally, we were able to make a hazard map that shows the levels of water in many locations in the Shitomo area in the case of flooding, and I am very proud of it.

Every day I found something new in Japan. I feel very happy because I have met many good and friendly people and have visited beautiful and impressive places. So, I would like to express my heartfelt gratitude to all of you.



President Ito. Keigo and Yue on my sides

私の人生を大きく変えたタイでの国際インターンシップ

教育学部人間発達科学課程 日本語教育コース 4年 森本 真央

三重大大学の国際インターンシップに参加し、タイに1ヶ月間日本語を教えに行かせていただきました。ここでは、心に残った体験の1つとして、ホームステイ先で訪れた経済的に裕福ではない子どもたちが通う学校で、幼稚園から中学校までの各クラスでTAさせていただいた体験を述べさせていただきたいと思います。そこでは、教師という立場ではなかったため、一方的に日本語を教えるのではなく、一緒に空間に飛び込み、共に学び合える喜びを得ました。相手を知ろうという作業の中で、もっと勉強したい、知りたいという意欲が自然と湧いてきました。それが、「学びの原点」、新しい世界へと踏み出す喜びなのだと感じました。言語としてのコミュニケーションは不十分でしたが、同じ空間を共有することで、共に分かり合おうとする言葉を越えた一体感を生み出すことが出来ました。そのことから、国籍や言語が違って、相手を知りたい、分かりたいという心があれば通じ合えることを学びました。

タイでの生活を終えて

最初はなかなか英語が通じず、生活面でも右も左も分からない状態で苦労しました。しかし、本当にタイの方には親切にさせていただいて、自分たちの仲間として受け入れてくれました。また、私たちは、先祖が作ってきた歴史や背景という土台があって今の関係があるのだとも感じました。タイに行ってみて改めて自分の生まれた「日本」という国がどういうところなのかをグローバルな視点から見つめ直すことができ、新たな角度から考えることが出来ました。日本は先進国と言われていますが、真の豊かさとは何なのかとも考えさせられました。この1ヵ月で巡り合った方々との出会いは、私の一生の財産であり、宝物です。一ヵ月という短い時間でしたが、学べたこと経験できたことが山のようにあり、たくさんのことを吸収して、少し自分でも成長できたのではないかと思います。



タイでの国際インターンシップに参加した学生



TAとして子供たちに日本語を教える学生たち

国際インターンシップ体験記：「言葉」の大切さを学んだ1ヵ月

教育学部人間発達科学課程 日本語教育コース 茂谷 彩加



東アジア研究所のPRビデオ作成風景

私は、2010年2月から3月にかけての1ヶ月間、三重大大学の国際インターンシップ・プログラムに参加しました。派遣先は、タマサート大学ランシットキャンパスの東アジア研究所です。東アジア研究所とは、日本語・中国語・韓国語のセミナー、研究等が行われている立派な施設です。

インターンシップでは大きく分けて3つのことを行いました。1つは派遣先である東アジア研究所のPRビデオ作成です。本格的なビデオだったため1ヶ月の内、最も多くの時間を費やしました。私たちはPRビデオの脚本から、台本作り、配役決め、絵コンテ作成、カメラマンへの指示に至るまですべてをまかされました。初めて行う作業やプロジェクトの大きさにプレッシャーを感じながらも、たくさんの方々に協力してもらいながらビデオを作り終えたときは、充実感でいっぱいでした。

2つ目は、カンチャナブリ県でのホームステイです。たった4日間の滞在でしたが、ホストファミリーとの出会いや、カンチャナブリの幼稚園、小・中学校で子ども達と過ごした時間は私にとってかけがえのないものになりました。

3つ目は東アジア研究所の日本語クラスでのティーチング・アシスタント（TA）です。教案、教具の作成をし、90分の授業のうち、30分間を2回担当しました。日本で大人数のクラスで授業ができるような機会は多くはなく、このTAは本当に貴重な体験でした。

インターンシップでは様々なことを経験しましたが、全体を通して感じたのは、「言葉」の大切さです。タイでは友人とタイ語・日本語をお互いに教え合いながら、タイ語、日本語、英語を織り交ぜて会話をしていました。タイの人たちは私たちがつたないタイ語を少し話すだけですごく喜んでくれ、すぐに打ち解けられました。「言葉」がコミュニケーションの上でなくてはならないのだと実感できました。そしてこれは私が日本語教育を行うモチベーションにもなりました。

インターンシップで体験したことはすべてが宝物で、またこれからも様々なことにチャレンジする気持ちを持ち続けたいです。



日本語クラスでの教育アシスタント活動